

死骸見つかり大声あげて

ここじゃここじゃといふその声を

聞いて集まる追手の人数 無残なりけりこの場のしだら

とても返らぬ事なりければ やがて村内常楽寺とて

時の住職大和尚さん それに頼んで弔いをして

二人一緒に石碑を立てて 人の噂にさてのこりけり

別府の伝説

## 霊泉・霊湯

掘 藤吉郎

### 参考文献

『日出町地方史料集成1 大神村史 草案』佐藤 曉編

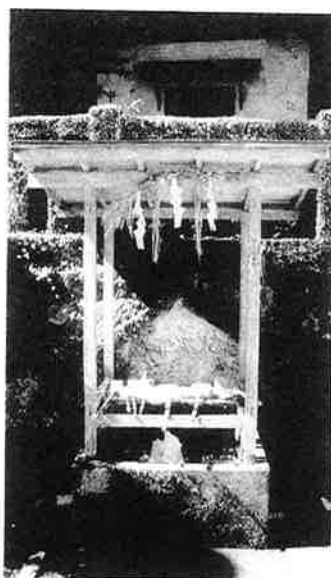
日出町地方史料刊行会 一九八四年

『大分県日出藩史料3 凶跡考 その3』佐藤 曉編

日出藩史料刊行会 一九六八年

『大分県郷土伝説及民謡』大分県教育会編

大分県教育会 一九三一年



万太郎清水

奇水万太郎清水  
別府の氏神八幡朝見神社の拝殿と齋殿の中間の玉がきの元からこんこんと湧く泉水がある。どんなに真夏の旱天が続いても水量の減ることもなく、洪水の折にも濁りを見せない清冽な清水が「コボツ、コボツ」と快調な響

きを立てて涌き出ている。この清水が朝見石井の万太郎清水と名つけられた奇水である。

天明三年、日本六十余州に亘って水飢饉が発生した。

諸国到るところ夏の太陽が際限もなく照り続いた。一滴の雨も降らず田は枯れ果て、根株を張った稲は頭を垂れて萎れていくし、農家や民家の井戸も水枯れが極度に達してしまった。それにもかかわらずこの石井の水はこんなと涌き続け、朝見の村は彼方此方より水もらいの人々で満あふれるといった有様である。

むかし、別府村の流川あたりに住んでいた。万太郎というものがあつた。永いあいだ床に着いており随分治療をしたが病はますます重くなり、医者も手を離してしまつた。

万太郎はしきりに水をせがんだが、医者は「重病の人に水を飲ますことなどもつての外、水を与えれば立ち所に死んでしまう」といつて禁じたが、昼となく夜となく水をせがむので、家人はどうせ死ぬのならば病人のいうとおりに水を飲ませることにした。そこで、朝見の石井の清水を汲んで帰り末期の水のつもりで飲ませると、不思議

議や医者よ薬よと八方手をつくしても効目のなかつた万太郎の病気が目に見えてよくなつた。

回生の望みを断たれて死を待つばかりであつた万太郎や家中の喜びは筆舌に尽せぬものがあつた。家内の者はたびたび石井の水を汲んできて飲ませているうち、十日もたたぬ内に全快して床払いをするようになった。

日頃より氏神八幡を信仰する万太郎に八幡大神の霊が加護を垂れて奇水を授けたものであるう。こうした奇跡があつてのち村人はこの清水を万太郎と呼び伝えた。

この水は、茶の湯に用いると天下第一であると茶人仲間称賛されたと云うことである。別府をたびたび訪れた田能村竹田は

「朝見の祠に詣づ 祠の西数町に井水有り石間に出づ

茶に宜しと相伝へ里中第一と為す 山を下り長松寺に

至り瓶を洗ひ石井の水を試む 果して佳し……」

この水の良さを激賞された。今の万太郎清水は、天明年間に神社の上手にあつた石井の水源から現在の位置に引いたものである。

用明天皇の病気を治した濱脇の湯

濱脇は別府最古の温泉であった。まだ別府の町に温泉のない時代にもう温泉が湧いていた。吐呂の湯といつて神武天皇が御東征の時も軍船をつなぎ湯に浴したなどの伝説がある。

仁賢天皇の二年比古山（彦山）の神人に仙術を授かった砥並仙人と鹿仙女という兄妹は、濱脇の温泉を療病の法に使用して多くの者の病気を治したといわれる。

それから九十四年の後、用明天皇が蘇我と物部両氏の崇佛排佛の争いと、悪疫流行のため非常に心を悩ませられて御病気にかかられてしまったので、砥並仙人の開いた有名な濱脇の湯で仙人創始の入浴療法によって治療するため遙々下向されて入浴されたそうである。天皇は在任二年で崇峻天皇に皇位を譲られ、長い間濱脇に逗留して湯治され、よくなられて都にかえられた。

濱脇の地名は浜に涌く温泉と云う意味から浜涌と云う地名になったと云われる。無論浜に涌く温泉であるから塩湯であった。

万病に効く石城寺の加持水

昭和三十一年別府市に併合された内成の石城寺山の中心に、臨濟宗東福寺派の石城寺という古刹がある。

この寺は、奈良の昔、宇佐八幡宮に籠もっていた仁聞菩薩が開いたものであるという言い伝えがある。寺の由来は明和七年に当時の住職佛海和尚が書き残している。

境内にある唐の滝・護世滝・天狗岩・天狗の羽休岩・置石・柱石・八枚岩・座禅岩など石城寺八景は幽邃雅風に富み愛すべきものである。

本尊観世音は仁聞菩薩の作といわれ、観音堂の上手の懸崖から霊水が涌き出ている。日照りが続いても大雨が続いても水の増減というものがなく、常日頃と変わらずこんこんと涌き出ている不思議な水である。光仁天皇の御世に水の不自由なことを大変に嘆かれた仁聞律師が、三十七日の間座禅行のち得させてくれた水といわれ、人々は昔より仁聞律師の加持水と語り伝えている。

万病に効く上に安産の霊薬となり親子ともども元気で死することがないという有難い霊水である。

この外に石城寺には、

- 一 水口に虚空より石落ち両川に堰分けること
  - 二 水蛙（ヒル虫）人に災いをなさざること
  - 三 四十八井あり下り流れる水多きこと
  - 四 孕婦胎を分かつて死することなきこと
  - 五 失火類焼の災いなきこと
  - 六 河伯（河童）人に仇をなさざること
  - 七 青梅四時ありと云うこと
- などという石城寺の七不思議というものが伝えられている。

神のお告げで涌いた御夢想の湯

亀川の総鎮守として古い歴史をもつ竈門神社は、三十六柱の神をまつることでも有名である。神亀四年三月に大神比義が宇佐神宮の分霊を祀り、神宮寺の僧侶の手でお祭りが行なわれ、七坊が立ち並んで法燈燦々として輝いていたという。

三十六神に供える御供米を炊く水が今の山道の下に残る蛤色の水を湛えている井戸であった。この水で飯を炊いて供えたので、この水を御供水と云っていた。

あるとき、七坊の僧たちは、寂しい鎮守の森の境内に、沐浴水を出してもらおうと神霊に願をかけた。七日七夜の読経のうちに願成就の夜明、夢のなかに白絹の衣を着た白髪の老人が顕れて曰く、

「竈門の杜を守る僧よ、われこそは竈門八幡の化身なり。汝等の願いを聴き届けてやる。鎮守の杜の東南を掘れ、神湯が涌くであろう。」

というおわると姿が消えてしまった。

僧たちが眠りより醒めて白髪の老人のお告げの場所を掘ってみると熱い湯が地上に涌き出した。早速付近に浴齋を建ててますます精進潔斎して竈門の宮に仕えたといわれる。

神のお告げによって掘りあてた湯であるので、この湯を神湯と崇めたてまつり、温泉を御夢想の湯と称えた。

この神湯の付近を湯の森と名つけ今に到っている。今の御夢想温泉の位置は昔と違っているが、この神湯を引いたものであり地名も昔のまま湯の森と称えられている。

脚をいためた鳶が発見した霊湯

別府八湯の一つである明礬温泉は、むかし平湯立小野村と呼ばれ、豊前佐田村から別府に出る官道筋で、奈良朝の始めに仁聞菩薩が温泉場を開いたところといわれている。

明礬山の南麓に炭酸泉が湧出している。硫黄泉と酸性泉ばかりこの温泉場には珍しい泉質の変わった温泉である。この温泉を鶯の湯と呼んでいる。

この温泉の発見は古いことで、一羽の鶯が毎日のように空高く翔けては明礬山の南麓に舞い降りてきまったりと飛び立ってはいづことも知れず飛び去ってしまう。山で薪取りの百姓は小首をかしげ

「不思議なこともあるものじゃ、鶯という鳥は大空を翔けて遊ぶのに、毎日毎日空から同じ場所の木森のなかに降りていく。」

声を殺して木の根を伝って忍び足で近寄り、木立の間よりうかがうと、二尺四方の地の窪に透き通るような湯がフツフツと湧き出て、湯煙がほのかに立ち昇っている。

毎日同じ時間に飛んでくる鶯は、片脚に大きな傷を受けて自由がきかないようであった。鶯は休ごと気持ちよ

さそうに湯につかっている。

百姓は、明礬には硫黄臭い湯ばかりと思っていたのにこんな綺麗な湯もあったのか。これは得難い温泉じゃ。

いいものを見付けたが、今わしが飛び出したらかわいそうな意はもう再びこの湯に来なくなるだろう。このまま誰にも知らせずに鳥の脚がよくなるのを待ってやろう。

毎日山仕事の片手間に鶯の舞い降りるのを見て楽しんでいたが、一と月も立つと脚の傷も癒えたのか鶯の姿が見えなくなった。

湯は、炭酸泉で針が落ちて判るように澄明なものである。早速村人に知らせ、そこに温泉場を造って如来像を安置し、鶯が発見したことに由来して鶯の湯と名付けたのである。

文永弘安の頃は、国主鎮西奉行大友兵庫頭頼泰、入道して道忍もこの温泉を好み、温泉場を開いたといわれる。

安産の霊水桃川の泉

横断道路の鳥居を過ぎて袖の木行きバスを合の原で

下車すると、桃川の清水のある場所はもう近い。大分郡の由布川から湯布院へ越す山道は、徳川時代までは御上使道といわれ、奈良朝では太宰府から大分の国府へ直行する官道を設けたところである。此処の字名を東山という。

今しもこの合の原に達する手前の坂道を鶴見岳の女神が登っている。女神は懐妊して、もう産気づいているようである。女神は尻を張り出して、あえぎあえぎ登っている。尻を張り出して歩くのは妊婦の特徴である。この坂を尻張坂というのはこのためである。

さて、女神がこの坂道を登るうちとうとう産気が来て子供が生まれそうになった。それで産湯を使うため水の涌くところを見付けて子供を生んでしまった。この川を桃川の観音水といって、女神が股を洗った川であるので「モモ」川と名付けられたのであろう。

女神は、そこから四・五丁登りつめたところに大きな石を見つけて、百日の間赤子を抱いて座っていたというので、この石を「百ヶ石」というようになった。石には腰掛けた女神の尻や手足の跡が残っている。

桃川の水のあたりには一本杉が繁り地蔵尊が祀ってある。水は炭酸水で飲むとたちまち腹の中にガスが発生して気持ちが良い。

女神がこの霊水のおかげで安産したということから、安産を祈るために今でも近郷近在はおろか遠方からも妊婦やその夫が、今でも桃川の水を貫いて来るということである。

鶴の病をなおした板地の霊湯

堀田の道を上がると板地という所がある。この一体は八幡地獄を中心とした地獄原で、地面からいたる所ブツブツと硫気が噴出して硫黄の臭気が鼻につき、地肌は荒れて赤白色の鉞泥土が散見される。この鉞泥土が顕れている付近が鳥の湯跡である。

昔、この付近は森林に囲まれた谷間であった。小さな川のせせらぎに可憐な鳥が集まっていつも楽しげにさえずっていた。この中に脚をいためた一羽の鶴がいた。

この鶴が、鶯の湯と同じように湯に脚をひたし、いつしか傷が癒えて飛び去った。これを見て不審に思った村

人が温泉を発見した。村人は、これは霊湯じゃ必ず切傷や打ち身に効くに違いないと相談して、この湯を広げて自分たちの浴場をつくった。人々はこの温泉を鳥の湯と呼んでいたが、今では霊湯も枯れてしまった。

かつて亀の井バスの地獄めぐりの車掌は、鶴見地獄付近を過ぎるとき、

「左の部落は又の名を鳥の湯跡と伝えられ、明治初年の当時まで、病に悩む鶴などが、谷の出で湯に集い来て、湯浴みせし地と申します。」

と説明していた。

八幡地獄は現在見る影もないが昔は大地獄であった。

元禄の頃は権助地獄と呼んでいた。これは、権助という男がこの地獄に身を投げて死んでからついた名である。

銭の湧く井戸

濱脇の河内溪谷の石橋を過ぎ、古刹宝満寺前を過ぎてやや行くと迫という部落に達する。ここは、萩原市左衛門という人が砂金を採集して精練した跡であるといわれている。付近の谷間の岩壁の裂目より清冷な水と共に

古銭が湧き出したということである。裂目が足形に似て



迫の銭井戸

いるところから足形井戸ともいわれた。岩頭に水神の祠が建てられ

て通称迫の銭井戸と呼んでいる。

言い伝えでは、貧乏で銭に困る者はここにきて水神にお願いして、裂目より水と共に湧き出る銭を拾い上げて借りて帰り家計の足しにした。しかし、借りた金を返さなかったり、無断で持ちかえるとたちまち腹痛を起し七転八倒して苦しみ、ついに命を落とすこともあったといわれている。

今でも自然岩の溜りの底に銭の形がついているが、銭

を拾う者はなくなつてしまつた。

砂金の採集によつて巨万の富を得た秩屋一門は大金持ちになつたが盗賊の難を逃れるために、黄金を朝日照る青木の元に埋蔵したという。今日に至まで埋蔵箇所は不明であるというが、明治十五年頃、欲の深い連中がこの埋蔵金を掘り当てて金持ちになろうとして掘つたが、一銭も出なかつたとか。当時埋蔵金の試し掘りできた洞穴や精錬冶金の作業場の跡という箇所も残つていていろいろの話題をまいている。

#### 酷男を美男にした観音様

横断道路をからそれて東山山の口の部落に着くと付近に山の口溪谷という、大分県五十勝の山紫水明の溪谷がある。あまり人々に知られていないが、別府の奥座敷ともいった所で、溪谷の美、清冽な流れは秘境として十分の価値をもっている。

雨乞・城ヶ岳の山峡に源を發して流れ下り、溪谷をつくつて大分郡阿南村から大分川の本流に注いでいる。この溪谷には、観音滝・日暗滝など多数の滝がかかり、真

夏の一日は是非足を踏み入りたい所である。

観音滝の付近に捏山という部落がある。部落といつても人家は三軒しかない寂しい所である。

今から八百余年前、この捏山の部落が榮えて田畑数百町歩を持つており、大分限者といわれた稗の長者仙衛門という者がいた。夫婦の間には子供一人しかない。黄金は積み、田畑は有餘つて何不自由ない暮らしをして、付近の者からは長者長者と尊敬されるが、仙衛門夫婦も寂しい生活である。

たつた一人の子供権之丞は生まれ落ちるとから全身に醜いイボだらけである。長者も、家名を思い、この醜い子供可愛想でならないが家柄からいつても後継ぎにはすることが出来ない。民百姓の頭に立つて将来この捏山を支配するのに、こんな顔では嫁にも来てがない。長者の総領でありながら可愛想とは思つが勘当してしまつた。

昨日までは長者の子として人々にかしづかれ、何不自由のない暮らしをした権之丞も、あまりの仕打ちに父母を恨んで死ぬより他に選ぶ道はないと、滝壺に身を投げたのであつた。その時何処からともなく白髪の老人が現



われて、

「そこな子供死をせくではない。何時でも死ぬるぞ、命は大切にしろものだ。ここより八丁下れば竹やぶの中に滾々と涌く井戸がある。その泉をみつけておまえの全身を泉で洗えばよい。夢々うたがうなかれ」

この老人の姿は不思議や消えてしまったが、権之丞の体は滝壺の中から岸の上に寝ているではないか。

権之丞は目が覚めて夢かとはかり喜んで、いそいで老人の言ったとおりの井戸を尋ねて、やっと探し当て、この泉で全身を洗うと忽ち紅顔の美少年となった。早速父母の許に帰って事の次第を話すと、長者夫婦の喜びは大変なものであった。これも日頃信ずる観音様の御利益であると云って、石工に頼んで観音像を刻み、この滝に安置したということである。

よって、この滝を人々は、後々観音滝と称するようになったといわれる霊験の伝説である。

この滝の下流には、目暗滝があり、その真下には恐ろしい蒲団淵という底知れずといった淵がある。水は青黒く静まって一人ではこの淵の側には立てないまでのもの

で、人を呪うときは、鎌をこの淵につけると淵の主は鉄気をきらうため、その人が呪い殺されるという。夕方の淵には蒲団のような魔物がぼっかりと浮かぶといて恐れているが、現在この魔物を実際にみたという古老もある。

今では、この観音様を「イボ観音」といつているし、神のお告げで見付けた涌出の霊水は、今でもイボが落ちるといつて水貰いの人が来るということである。イボに悩む人々は一度、イボ観音にお詣りして観音水をもらって試してみたら如何であろう。

柴石の滝湯で病気を治した親仁親王

別府八景の一つで湯川に湯滝で有名な柴石温泉は、地獄巡りコースの血の池地獄の上手で、溪谷をもつ閑静な温泉場であるが、柴の化石が所々に出るので柴石の名がある。

昔は速見郡竈門荘野田村と呼ばれ、ここに赤湯山長泉寺という古刹があったが、今は血の池地獄の左側に移転しているが、往昔は立派な寺院で、薬師如来を本尊として

いて靈驗あらたかなもので、乳薬師とも称され、乳不足の子持ち女は遠近から参詣して、その御利益をうけていたということである。如来像の作者は仁聞菩薩というがその信疑は不明である。

人皇第十二代景行天皇が熊襲を御西征の時にここにきて、柴石温泉に入浴したということも伝えられている。

今から九百十二年前の寛徳元年の三月に御朱雀天皇の皇子、親仁親王様が病気にかかられて諸種の療治をなされたが、どうしても全快しないので、何でも豊後の速見郡の温泉がよかろうということになって、別府に幸駕されて赤湯山長泉寺を行在所、すなはちお宿となされて柴石温泉の滝湯にかかられて、今でいう理学療法をやられたのである。

柴石は蒸し湯があり、滝湯があり溪を流れるのもみな温泉である。流れの中の大きな石を枕にして青天井を眺めて治療されたのである。それで、この石を親仁親王の枕石と名付けて保存されている。

親仁親王は、この温泉で約七ヶ月ばかり温泉治療をされ、病気もようやく全快したので都へ帰られたが、寛徳

二年の正月、御父君御朱雀天皇が崩御なされたので後を継がれて、御冷泉天皇となられたのである。その後、速見郡の司に命じて、長泉寺を建立されたと伝えられている。

豊後の碩学といわれた脇蘭室の遊湯泉記に、

「一 溪を渡れば温泉三穴あり 一は田隴柴石の中に出づ 清くして熱し川に注ぎ即解く 一は路傍に出づ下

は浴す可し 土俗伝えて景行帝西征の日に浴す

猶天皇湯と呼ぶ 巨岩あり之を鑿□てば木の葉見ゆ

文理歴然たり」

と記してある。

